巻頭言

医師にとっての師とは

東邦大学医療センター大森病院小児科

佐地　勉

AHAに行く愉しみの一つにexhibition hallに店を出しているbook store探訪がある．毎年秋のこの時期を待っていたかのように新書が発刊される．昨年の一番の感動本は，30数年ぶりに第2版が出版された『Nadas' Pediatric Cardiology』である．1970年代には，WatsonのCardiology，RudolphのTextとならんで，数少ないbibleであった．以後長い間，“赤いNadas”をじっと本棚に立ててあった．1977年秋，東京女子医科大学に研修に行く前の最後の1カ月間は，準備のためにこの赤いNadasに没頭した．線を引きすぎて汚れてしまっている．“韋編三絶”であった．だから，できればいつかこのtextを書いた本人に会えればと思っていた．

その後1980年代であるが，学会発表でProf. Rashkindから質問を受けたり，間近でKirklinを拝めたり，RudolphとToronto大学でのシンポのreceptionのときに立ち話で談笑したり（後から知ってびっくりしたのだが），Perloffの隣の席に座って1時間の「Ask The Expert」のQ&Aの討論に参加したりと，この仕事に就いているからこそわかる極めて重要な巨匠たちに接することができた．1985年，NYのPCPS学会で杖をついて登壇したTaussigに対して観衆全員がstanding obationで迎えたときには体中が震えた．当時86歳であり，その2年後雨中の運転でトラックに突っ込んだと聞いてがっくりとした．結局残念ながら一度もNadas本人に巡り会うチャンスはなかったが，素晴らしき本の著者本人に会えることは至福の喜びではないであろうか．

話は変わるが，2008年の日本小児循環器学会総会では大江健三郎氏が講演する予定と伺っている．15年近く前になるが，医局で主催した小児科関係の学会に特別講演をお願いしたことがあった．ノーベル文学賞を受賞される2年程前のことで，お出迎えの担当であったので始まる前までご一緒させていただいた．ご存知のようにご子息の光君の学校への送り迎えをしておられたころで，“こどもの生命の広さと深さ”についての内容ある講演を聴いた．ちなみにこの2年後にも，当大学看護学部が講演をお願いしたことがあったが，このときも間近で拝聴させていただいた．私の連れ合いが，ご自宅に迎えに行く係りだったので会場までお連れする間の車中で，『人生の習慣』にご署名をいただき，私には『治療塔惑星』のおもて表紙に中野重治のお言葉をいただいた．「空のすみゆき 鳥のとび，山の柿の実 野のたり穂，それにもましてあさあさのつめたき霧に肌ふれよ 頬胸せなかわきまでも　10月」中野重治　佐地　勉先生，と．

最近，作家生活50周年を記念して，「大江健三郎　作家自身を語る」という対談本が出版された．そのなかで，愛媛の東松山高校2年の時，伊丹十三と付き合って文学にひきつけられ，出合った本の著者に憧れ，とっさに「東大の仏蘭西文学部に行って，この先生の下で勉強を始めたい」と言ったそうだ．「このときは人生で最も幸福な出会いだった」とも書いている．

医師にとって大事な出会いは，身近な師匠，達人，名人に加えて，患者も忘れてはいけない存在である．“一生の宝物”となるような患者がだれにも数例はいるはずである．その症例のお陰で医師としての人生が大きく変わった，飛躍した，大変勉強させられた，大人になったという，貴重でpricelessの体験である．言い換えれば，“ピンチをチャンスに変えてくれた症例”，“気づいたらずっと全力投球だった症例”である．

Sir William Oslerは，「よく書かれた患者のカルテはどんな教科書にも勝る」と言っている．その主治医へのご褒美のような症例もこの学会誌に掲載されてきたのであろう．そんな見方をすれば，また症例報告をみる楽しみが増す．